

JICA ボランテア 千葉

SVニュース
第19号
10周年記念号

平成二十五年春季公開講演会と通常総会を開催

創立十周年を記念して、初めに和太鼓演奏がTAWOOグループにより行われ、ついでJICA青年海外協力隊事務局次長山田健氏により「シニア海外ボランティアについて」と題する講演が行われました。

当会は国際協力機構（JICA）、千葉県、千葉市の後援を受けて春季公開講演会を五月十六日（木）、柏市のアミュゼ柏で開催しました。

当会創立十周年記念行事の第一部はJICAの初代千葉県国際協力推進員だった塩沢かおりさん他の和太鼓グループTAWOOの友情出演による勇壮な和太鼓の響きで開幕しました。

塩沢さんは青年海外協力隊員としてジンバブエに派遣され、帰国後はJICA派遣の



講演中の山田健氏

千葉県国際協力推進員となり、当会発足にご協力くださいました。

塩沢さんのメッセージを第四面に掲載しました。

第二部には山田健氏に「シニア海外ボランティアについて」と題する講演をいただきました。

山田氏はJICA入構後、オーストリア事務所、地域部準備室、派遣支援部を経て、アフガニスタン事務所次長、バルカン事務所所長を歴任しました。

講演ではシニア海外ボランティアの成り立ちから現在のまでの経緯をたどり、現在の課題とその解決のための方向を示唆しました。最後にバルカン事務所時代にセルビアで実施した日本のODAの映像を紹介しました。

十周年記念行事に引き続き、当会平成二十五年通常総会を開催しました。

平成二十五年定例会日程

日時 十一月三十日（土）
十三時～十六時
引き続き懇親会を予定
会場 浦安市国際センター

山本会長の挨拶に続き、来賓のJICA 青年海外協力隊事務局次長 山田健氏、JICA千葉デスク 田村美由紀氏、柏市国際交流協会副会長 小菅あけみ氏、青年海外協力隊千葉OB会副会長 成瀬猛氏、浦安市国際センターセンター長 藤松理子氏より自己紹介とご挨拶を頂きました。



成瀬 猛 氏



田村美由紀氏



藤松理子氏



小菅あけみ氏

続いて議事に入り、平成二十四年度活動報告、同会計報告、同監査報告、平成二十五年度活動計画、同予算案、同役員選出が付議され原案どおり可決されました。

詳細については、第三面をご参照ください。総会終了後、懇親会を開き、会員相互の情報交換を行いました。

「千葉県JICAシニアボランティアの会」創立十周年おめでとうございます。この間、大勢のシニアボランティアの方々から世界各地に派遣され、長年の経験を活かして派遣国の発展に大きく寄与されたご苦労に対しまして、心から敬意を表します。今回はこの紙面をお借りし、貴会と千葉県国際交流センターの事業との関係を紹介させて頂いた

当センターでは、国際交流・協力を推進し、多文化共生社会づくりを展開するため、ボランティアの皆様に対して活動の場を提供することや、各種講座の開催、各種会議などを通してボランティアの皆様や各団体の方々とのネットワーク化を図っています。

千葉県国際交流センターについて

(公益財団法人) ちば国際コンベンションビューロー
千葉県国際交流センター
センター長 安藤 忠男



ちば出前講座

発展途上国等について理解を深めていただくための「ちば出前講座」も開催しているところ

特に、ちば出前講座は、海外での様々な経験談を貴会の皆様にもお話しただくなど、多大なご協力をお願いしています。この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

また、民間団体の活動の場である「国際フェスタCHIBA」には貴会におかれては毎年積極的に参加され、日ごろの活動成果を発表するなど、当センター事業にも深い理解を示されているところ

この事業では、一般の県民の方々や高校生や高校生に国際理解を深めていただくためのセミナーの開催、

私共センターでは今後も様々な機会を捉え、皆様方のお役にたてるよう、千葉県の中核的国際交流団体として活動してまいります。これからも、センター事業にご協力いただきますと共に、貴会の益々のご発展をお祈りいたします。



国際フェスタCHIBA

公開講演会講演要旨

シニア海外ボランティアについて

JICA 青年海外協力隊
事務局次長 山田 健氏

本日はシニア海外ボランティアの発足から今日に至るまでの軌跡を追い、これから挑戦してみたくなるようなお話を試みたいと思います。

シニア海外ボランティアとは四十歳から六十九歳の方々に応募いただくことができる途上国における国際協力ボランティアです。

JICAの海外事務所を通じて各国からのボランティア派遣要請を確認し、一年以上の長期派遣ボランティアは毎年春と秋の二回、一般公募を行います。

応募者から提出いただいた応募書類が要請内容に合致しているかどうかの書類審査と、面接による人物審査を経て合格者を決定します。

合格者は赴任前の訓練を長野県あるいは福島県にあるJICA訓練施設において三十五日間の派遣前研修に参加いただきます。派遣前研修は語学研修が大半を占めています。なお長期派遣の場合はJICA負担でご家族と一緒に赴任することができます。以上が概略です。

さて、シニア海外ボラン

ティアの発足は一九九〇年に開始されたシニア協力専門家が始まりでした。

一九七〇年代に今日の高齢化を予想した経団連を中心としたグループが、日本の高度成長期を支えた方々の知識、技術、経験を、退職後途上国援助に活かすことが有効であろうとの提言から始まりまし

た。一九九〇年代のODA予算の伸びとともに国際協力への国民の積極参加、民間の経験・ノウハウの活用という声が高まり、さらに一九九五年の阪神・淡路大震災と、それを契機としたボランティア気運の高まり、ボランティア団体を税制優遇する特定非営利活動促進法が一九九八年に成立したのを背景に、二〇〇〇年代のいわゆる団塊世代の定年を目前に、日本全体でボラ

ンティア活動を促進する気運になりました。

そうした中で、シニア協力専門家に応じられた方々を技術協力の活動評価の対象にすることは好ましくないとの判断から、一九九六年からシニア協力専門家は青年海外協力隊と同じボランティアと、名称もシニア海外ボランティアとしました。途上国にてボランティアをやりたいという自発的意志を尊重し、活動成果は必ずしも求めず、生活費などの待遇を青年海外協力隊により近づけるように変更しました。

シニア海外ボランティア事業の課題としては、低下する充足率と低下する応募者数が挙げられると思います。

以前から途上国からの要請数に対して半数程度のシニア海外ボランティアの派遣でし

たが、ここ二、三年は四十割前半と充足率が低迷しています。

かつては七百人前後あった応募者数が、現在では四百人前後にまで落ち込んでいます。

これらの原因として様々なことが考えられますが、応募したいという気持ちがあっても、海外での活動で最低限必要と考えている語学力基準に満たないと思われたり、要請内容に十分に対応できるか不安に感じられる方が多いようです。

しかし、シニア海外ボランティアは単に要請内容を淡々とこなすことが仕事ではなく、日本やナマの日本人を伝える重要な使命があります。それは同時にナマの相手国の人々を日本の社会に伝えることでもあります。

私たち日本人は日常生活で外国人と触れ合う機会が少なく、途上国で生活や仕事をされた方々による体験の周囲との共有は、その国の人たちに対する私たちの心理的なバリアを低くする効果があります。真に世界が近くなる瞬間です。そのための皆さんの一歩を期待したいと思います。

応募に不安を感じられている方々は、まず派遣期間が一年未満の短期ボランティアはいかがでしょうか。JICAのホームページ上で要請案件

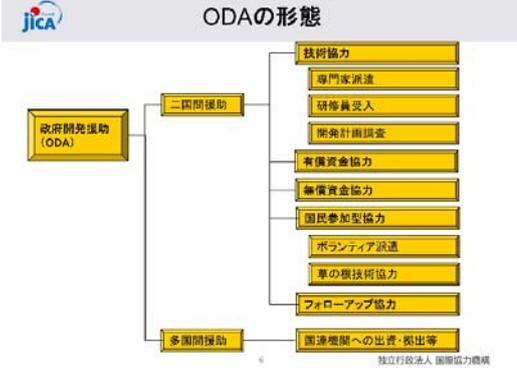
を公開していますので、是非アクセスしてみてください。

<http://www.jica.go.jp/volunteer/application/senior/short/>

本誌を国会図書館に納本

七月八日、国会図書館に当誌創刊号から十八号まで各二冊を納本し、同館蔵書検索システムで登録済を確認しました。

機関紙を通して当会の活動が広く知られ長く記録に留められることを期待し、今後も刊行の都度納本を継続する所存です。



ボランティアの形態	開始年	開始時	累計
青年海外協力隊	1965年	派遣中	1,693人 累計 37,920人
シニア海外ボランティア	1990年	シニア協力専門家(専門家の一種)として開始	
	1996年	シニア海外ボランティアへ改称(ボランティアへ)	派遣中 444人 累計 5,147人
日系社会青年ボランティア	1985年	海外開発青年(身体移住)として開始	
	1994年	海外開発青年(ボランティア)へ改称	
	1996年	日系社会青年ボランティアへ改称	派遣中 54人 累計 1,117人
日系社会シニア・ボランティア	1990年	専任シニア専門家(専門家の一種)として開始	
	1994年	日系社会シニア専門家へ改称(専門家の一種)	
	1996年	日系社会シニア・ボランティアへ改称(ボランティアへ)	派遣中 31人 累計 426人



納本された「SVニュース」各号

平成二十五年度通常総会を開催

五月十六日(木)午後三時二〇分より柏市のアミューゼ柏にて通常総会が開催されました。

出席会員三十二名、委任状提出会員二十五名で総会が成立する旨の報告と開会の宣言を行いました。

山本茂穂会長の挨拶に引き続き、来賓の山田健氏、小菅あけみ氏、成瀬猛氏、藤松理子氏の方々からご挨拶を頂きました。

山本会長が議長となり、坂出直哉、大久保邦衛両会員を書記に選出後、次の六議案が上程され、それぞれが原案どおり可決されました。

「平成二十四年度活動報告」

「同 会計報告」

「同 会計監査報告」

「平成二十五年度活動計画案」

「同 予算案」

「同 役員選出」

平成二十五年度役員人事では、新役員として大久保邦衛、坂出直哉両会員を迎え、山本茂穂、横田勝徳の勇退と、再任役員の及川淳一、大西輝明、加藤哲男、酒井國彦、白鳥貞夫、津田正臣、羽田亨の人事が承認されました。

なお平成二十五年度役員人事の詳細は、第十一面をご覧ください。

創立十周年記念特集

当会は本年十周年を迎えましたので、これを記念し本第十九号と次号第二十号に特集を組みます。第十九号では、JICA関係者からのご寄稿、また当会歴代の会長および一部の方から設立当初の苦労話や、活動の状況を紹介頂いております。

次号の二十号では、当会の主たる活動である出前講座、イベントなどの国際理解・協力推進・教育関連やSVニュース、ホームページなどの広報関連およびそれらを支える諸経費・会計処理業務等を担当してきた歴代副会長ほかの方々からの寄稿を予定しております。

新会長挨拶

当会の役割と重点活動

津田正臣

この度、会長の重任を仰せつかり大変戸惑っております。非才につきその任に堪えるものではありませんが、微力を尽くしたいと思っております。

当会は本年創立十周年を迎



え、順調に活動を拡大しております。これも会員の皆様方の

の総力の結集はもとより、JICA、千葉県およびご関係者のご支援の賜物であると感謝いたしております。今後も全会員が海外ボランティア経験を生かし、「地域社会への還元と貢献」活動に邁進し、発展を続けて行きたいと思っております。

その重点活動と致しまして
・国際理解・協力の普及のため
・出前講座開拓の強化
・会員の会事業への参画・協力促進のための会報電子版活用による広報・啓発活動の強化
・帰国したSVの入会勧誘促進による新会員の拡充
等を実施してまいります。また、当会事業はJICA支援経費、会費会計としての会員からの会費及び寄付金等により運営されていますが、必ずしもゆとりのある状況下にはなく、諸施策により支出の節減に努めたいと思っております。

ております。どうぞご期待ください。

今後の当会の活動を発展させるためにも、本特集でのJICA関係者の励ましのお言葉や、先人の方々のご苦労や知恵は大いに役立つものと思っております。

(津田正臣)

千葉県JICAシニアボランティアの会十周年に寄せて

独立行政法人国際協力機構 地球ひろば地域連携課 課長 長谷川敏久



千葉県JICAシニアボランティアの会には、いつもテイアの会の皆様には、いつもたいへんお世話になっております。

JICA地球ひろばより、千葉県JICAシニアボランティアの会創立十周年ならびにSVニュース十周年記念号の発行について、心よりお祝いを申し上げます。

会員の皆様、とりわけ歴代役員の皆様のたいへんなご尽力により、全国的に見てもきわめて活発なシニアボランティアOB会の活動が実現し、十周年を迎える事になったものと確信しております。

私は、一昨年十月にJICA Aタンザニア事務所より地球

ひろば地域連携課に異動してまいりましたが、着任早々の十二月に公開講演会・定例会にお招きいただき、初めて貴会の皆様とお目にかかる機会を頂きました。

タイ事務所でご一緒させていただいた上田義晴元事務局長とも十数年ぶりに再会することができ、また、大勢のエネルギーギッシュなメンバーの方々とお話しする機会を得て、非常に勇気づけられるとともに、いろいろと勉強をさせて頂いていただきました。

JICAが毎年実施する「国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト」には、近年、あわせて七万通を超える応募を頂いております。

千葉県内の中学・高校からの応募は、平成二十三年には約三千四百通でしたが、二十四年には約三千六百通とかなりの増加傾向となっております。この実績から見て、千葉県の学校において、国際協力に対する関心が高まっているということがいえるのではないかと考えています。その要因は様々あると思いますが、シニアボランティアの会の皆さんが、積極的に各地域の自治体、学校などへの働きかけを継続的に進めていただいていたことがひとつの大きな理由ではないかと考えております。

田中理事長のメッセージの中に、「開発途上国を元気に



元気いっぱいTAWOOの塩沢氏

すること、日本も元気になるような国際協力」という言葉があります。シニアボランティアの会の皆さんによる帰国報告会の開催や地域での各種イベントへの参加、あるいは地元自治体へのご報告などの活動は、まさにこの言葉を実現しているものであると考えます。

十周年に寄せて
塩沢かおり
(初代千葉県国際協力推進員)

千葉県JICAシニアボランティアの会十周年、おめでとうございます！
記念すべき日に、和太鼓T

A W O Oで演奏させていただきました。十年経って、それぞれがこの十年の中で歩み、出会って来たことが大きな河のようになって、また再会できたことがとても嬉しいのです。一緒に演奏してくれたメンバーは、国際協力推進員の仕事を終えたあとにできた、かけがえのない仲間です。推進員のときに出会った素晴らしい人たちと、太鼓で出会った大好きな人たちとが重なったこともとても幸せなことです。十年経ってみたら、日々忙しく活動している推進員さんがいて、シニアボランティアOB・OGのみなさんと自然に共に活動していて。元気で素敵な推進員さんや明るいみなさんを見ていて、この仕事に関われたこと、本当に感謝の気持ちです。ありがとうございます。その、ひとつひとつの経験が、いまの私たちを作るため、また出会うためにあったことなんだなと、しみじみと感じました。そしてまた、今回の新しい出会いが、またつながって大きな河になるといいですね。これからも末長くよろしくお祈りしています。

最初の一年
及川淳一 (初代会長)

「交通費は自前ですが、シニアボランティアのOB会をつくりませんか」との私の問いかけに、「つくったほうがいいね」と派遣前研修で知り合った品川洋之助さん、「交通費なしでも行きますよ」とホンデュラスのシニア仲間、梅谷陽子さん。のちに当会創立時の発起人会の中心になっていたいただいたお二人との最初の会話です。

この電話の数日前に私は、「JICAから派遣された人がいるらしい」との風の便りに誘われて、二〇〇三年卯月の陽気の中を、海浜幕張の駅前にそびえるWBGマリブイーストの十四階にある千葉県国際交流センターを訪れていました。ここで出迎えてくれたのが、JICA東京国際センターから「国際協力推進員」として派遣されてきた塩沢かおりさん。



TAWOOの皆さんと

「出前講座の講師派遣の依頼がきて、だれに頼んだらいいのかわかりません」とのこと。「それではシニアのOB会をつくらう」という話から、塩沢さんの絶大な協力を得て、創立の準備を始めたのです。

会の発足時のエピソード
品川洋之助 (二代目会長)



二〇〇三年春、シニア海外ボランティア(SV)の派遣前研修で懇意になつた及川淳一さんより「千葉県出身SV経験者のOB会を作ろう」との呼びかけを受け、ちば国際コンベンションビューローに有志数人が集まって発起人となり、設立総会、規約、運営方針を討議しました。当時の千葉県国際協力推進員塩沢かおりさんがJICA東京国際センターとの調整、県内の帰国SVへの連絡や会場の手配など事務局の仕事をおこなって出でくれ、大助かりでした。

翌年一月には塩沢さんの紹介で「浦安市国際交流・協力フェスティバル」に参加して初めて「国際協力クイズ」を実施し、三月には「ちば地球市民のつどい」に参加のあと、念願の「SVニュース千葉」を創刊しました。この最初の一年間に、JICAの支援や役員・会員のみなさんの創意・工夫により、当会の現在にいたる活動の「カタチ」が形成されたと考えています。ちなみに初年度のJICAの活動支援経費は、四十二万円余でした。

役員は会長 及川淳一、副会長 梅谷陽子、幹事 品川洋之助、山本修身(事務局長)、岡本栄一郎(SVニュース創刊号担当・題字制作)、会計 監査 楠木孝雄(以上、敬称略)、会員三十二名での船出でした。



会発足十周年を迎えて
山本茂穂（二代目会長）

当面の活動方針は「会員相互の親睦を図り、国際協力推進員の活動を助けながらJICAボランティア事業についてPRすること」と決めました。

同年九月、家内が（財）日本シルバードボランティアズよりスリランカ・コロンボ大学に日本語教師として派遣され、小生は憧れの随伴家族として共に赴任し二〇〇四年六月任期終了後、帰国しました。

コロンボからの帰国前、及川さんからメール連絡があり、彼がSV再応募のために会長を辞めたいので後を継いでほしいとのことでした。帰国後第二代会長となり、二〇〇一年通常総会で辞任し山本茂穂さんに託すまで七年間勤めました。会長退任にあたり、JICA広尾センター貝原孝雄所長から感謝状をいただき、有難い貴重な記念となりました。

諸先輩のご努力で当会は発展を続け、去る七月で設立以来十年の節目を迎え

ました。

日本におけるJICAシニア海外ボランティアOB会の一つとして実績を積み重ねていくことが出来たのは、誠に同慶の至りです。

私が発足と同時に入会した動機は当会の活動方針である「会員相互の親睦を図ることを基軸にしながら、開発途上国で活動した経験を活かし、地域社会や学校教育の場においてわが国の国際協力の重要性を訴えて行く」に共感を覚えたからです。

平成六年ごろには、日本の海外生産比率が年率数ポイントのペースで伸び始め、逆に青年海外協力隊の応募者数が毎年千人近い落ち込みの状態にありました。世界の平和に貢献するために、また日本が成長を続けるためには、国際協力が大きな力になることを地域社会や学校教育の場において啓蒙するため、国際理解教育に注力したいと考えたのです。

この活動方針に賛同して頂ける方も多く、当会の会員数は十年間で約三倍の一〇〇名近くになりました。

会の活動成果を一〇〇ピースの「国際協力推進支援ジグソーパズル」に譬えると、会員の皆様の「支援を得ながら、大過なくその一ピースとしての役割を果たす事が出来たのは身に余る喜びでした。

シニアボランティアの会 設立当時の思い出

梅谷陽子（初代副会長）



不安一杯で参加した中米ホンジュラスのシニアボランティアでしたが、現地の人達の熱い学

ぶ気持ち嬉しく、無事に勤めを果たせた満足で二〇〇二年十二月に帰国しました。

その数か月後、及川さんからOB会を発足させませんか？との誘いには、もちろん大賛成。品川さん、楠木さんたちとちば国際コンベンションビュローで幾度か会合を持ちました。

先日、十周年記念行事で和太鼓演奏をしてくれた塩沢かおりさんも毎回参加して、JICA東京国際センターとの仲立ちをして下さいました。

青年海外協力隊の千葉OB会とも接点を持つと彼等の会合にたびたび参加しました。彼らが主催して毎年開催していた「家族連絡会」にも参加しました。JICA国際協力中学生エッセイコンテストの第一次選考会にも出掛けに行きました。当時は青年海外協力協会主催の国際切手集めも熱心で、持ち寄って日比谷の展示会で売ったりもしました。

厳寒の一月、浦安市の国際協力フェスティバルにシニアの活動写真を掲げ、初めて行った「国際協力クイズ」にJICAの海外研修員が持つてきてくれたお土産を正解の景品にしたりしました。その後、四街道市の市民文化祭にも参加させて頂き、シニアの紹介をした日もありました。

一番印象に残っているのは、塩沢さんがお膳立てして下さった浦安市美浜公民館での自分の現地活動報告でしょうか。

最後になりましたが、シニアに派遣された女性の方々にお願いがあります。お忙しいでしょうが、帰国後はぜひOB会の役員をなさって頂きたいです。女性が一人加わると会が和み華やきます。

シニアボランティアの会 の発展に寄せて

上田義晴（元事務局長）



ラオスJICA事務所でのボランティア調整員としての任務が終了後の二〇〇四〜二〇〇八

年度まで五年間、当会の役員に就任し、当会の主たる活動に従事してまいりましたが、

思い出に残る特記事項を披露申し上げます。

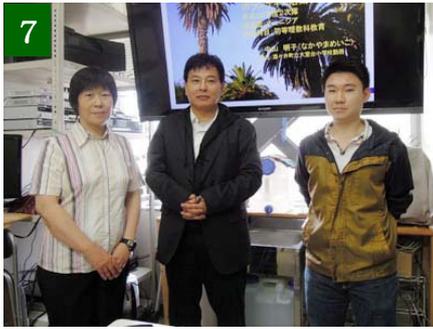
①二〇〇四年〜二〇〇五年度には、千葉県招聘の海外研修員受入事業への協力活動（日本語通訳）を通じて、千葉県への当会ボランティア活動が一定の評価を得ましたが、千葉県側の事情で継続不能になったことは誠に残念でした。

②当会の目玉商品として、「国際理解教育」の立ち上げと拡充に尽力してきましたが、千葉大学教育学部吉田教授の年間授業の中に、当会会員による「国際理解の実践」講座を持たせてもらう話が実現したことも、当会ボランティア活動の幅を広げることになりました。

③当会の活動は、名実共にJICAのサポーター役であることを自覚し、JICA本部とのコミュニケーションを密にすることの重要性を認識し、二か月に一度、当会とJICA本部との「情報交換会」を定例化してきました。これは、JICAの基本方針に沿った当会活動推進の上で、極めて有意義だったと信じています。

今後とも、会員相互の親睦を図り、国際協力推進活動の推進を行う事によってますます会の発展されることを祈念しております。

千葉大学



7

● 国際理解第一回連携授業（5月14日、講師 横田勝徳会員、「日本のODAについて」）

横田会員は日本の国際協力の歴史的経緯や現状を中心に講義を進めました。

● 第二回授業（5月18日午前、中山明子会員、「チュニジアの算数指導を通して」）

中山会員はチュニジア国立教育改革センターでの小学校課程の算数におけるカリキュラム指導と、教室に

おける教師の算数指導法の改革について詳細に解説、「ボランティア」は現地では尊崇される存在とみなされ、氏自身が誇りをもって活動できたと話しました。（写真7）



8

● 第三回授業（5月18日午後、大西輝明会員、「若者の環境意識と環境教育効果」）

大西会員はヨルダン、コスタリ

カ、ネパールの三カ国と日本で得た大学生の環境意識の比較などを概説しました。

● 第四回授業（5月25日午前、中村時夫会員、「パラオの素敵な人々ー算数、数学の指導体験」）

中村会員は「国際理解教育：人と人との交わり」の副題をつけ、ウェ

ブを利用した北半球の島々の歴史調査実習から授業を開始、パラオでの小学校の算数、中学校の数学の教育指導活動を説明しました。

（写真8）



9

● 第五回授業（5月25日午後、竹花晃 会員、「ネパールの国際山岳博物館運営より」）

竹花会員はネパールの国情、多民族事情の紹介から始め、国際山岳博物館の展示物の収集、展示方法の改

善、スタッフの教育、集客強化、自立化のための記念品販売などの経営指導内容を、山岳写真なども交えて詳細に説明しました。（写真9）



10

● 第六回授業（7月9日、山本茂穂会員、「平成25年度連携授業のまとめと整理」）

山本会員は統計資料の取り扱いやODA周辺の話題、途上国の学校の実情例などを紹介しました。

麗澤大学



11

● 国際ボランティア論第一回連携授業（5月20日、佐藤 聡 会員、「モンゴルでのボランティア活動で得られたこと」）

佐藤会員はモンゴルの地理や文化

事情の話から始め、氏の専門の資機材調達の話や現地人に対する技術移転経緯などを、きれいな写真とともに紹介しました。（写真10）

● 同第二回授業（6月17日、村田淑子会員、「南米での日系社会で過ごした5年間」）

村田会員はパラグアイ日系社会に対する支援の必要性や日本語教育を継続することの重要性に触れ、南米

の日本語教育は日本と南米両国に通ずる豊かな心を持つ日系人育成を目指すべきだとの話をし、休憩時には南米クイズやマテ茶の回し飲み体験、物産の紹介などを行いました。

（写真11）



12

● 国際交流・国際協力専攻基礎演習第一回連携授業（7月3日、河田眞智子会員、「ネパールの幼児教育指導に従事して」）

河田会員は海外ボランティアへの動機から、ネパールの社会情勢、現地での活動報告へと、豊富な写真を

用い、順を追って説明しました。ボランティア活動は必ずしも言語に頼る必要はなく、行動や心だけでも充分、交流が可能であることを強調しました。

（写真12）

出前講座実施報告（2013年3月～2013年8月）

学習塾ネクスファ柏教室

- 第一回授業（2013年3月8日実施、講師 黒田正太郎会員、演題「マレーシアでのボランティア体験」）

黒田会員はマレーシア人との交流、イスラム教の風習などについて説明し、持参したマレー人の衣装を

着用させたり食品や貨幣に触れさせたりすることで児童の関心を引き付け、授業は2時間を越える長丁場となりました。（写真 1）



1

- 第二回授業（6月3日、白鳥貞夫会員、「バヌアツってどんな国？」）

白鳥会員はバヌアツの地理を説明し、簡素な食べ物、電気やトイレがないという日本とは全く違う生活、

手製のバンジージャンプ、など現地生活を紹介しました。児童らは始めて聞くこうした話に驚きをおぼせないうでした。



2

公民館

- 市原市立有秋公民館（4月26日、酒井國彦・徳子両会員、「技術移転と随伴家族の喜び」）

前半は酒井國彦会員がODAの変遷や現状、JICA活動の意義などを紹介、その後、チュニジアでの自身の

ボランティア活動について話をしました。後半は、随伴家族として同行した徳子会員から言葉の不自由さからくる買い物の苦労や安全対策などのチュニジア生活の話がありました。（写真 2）



3

- 市原市立市津公民館（5月8日、横田勝徳会員、「モンゴル体験談ー任務・交流・自然」）

モンゴルの国柄、歴史、政治、経済の概要を紹介しました。聴講者に

は数日後に馬頭琴演奏会を控えている人々がおり、講師はモンゴルの伝統音楽を流し、モンゴル音楽が持つ独特の雰囲気を感じてもらおう試みをしました。（写真 3）



4

- 旭市海上公民館（7月18日、寺田博義会員、「微笑みの国タイ」）

寺田会員は異文化との向き合い方や現地での生活のあり方など、外国との係わり合い方の基本を幅広く紹介しました。講師は、日本人がタイ

の人々に学ぶべきことの一つは笑顔であると指摘し、また、アジアで日本人を見分けるには、首を傾げたり頷いたりなどのしぐさを見ればよいとの話を紹介しました。

（写真 4）



5

放送大学

- 放送大学千葉学習センター（4月28日、田中忠昭会員、「国際協力の現場ーアジア・中南米編」）

田中会員は若者から高齢者までの放送大学生に対し、赴任したドミニカとベトナムでの品質管理に関する

ボランティア体験の講演を行いました。この授業はJICA関係者による2日間の連続講義の一部で、放送大学のスクーリングの一環として行われたものです。（写真 5）



6

市民大学

- NPO法人パートナーとおかつ主催「まなび屋」（6月11日、川奈部くに子会員、「海外で教育ボランティアをしてーパラグアイとトンガ」）

高齢者25名の聴講者に対して、川奈部会員が標題の講演を行いました。川奈部会員はJICA シニア海外ボ

ランティアとして赴任したパラグアイとトンガ両国の風土や産業、教育と社会の貧困との関連性、日系人家族の暮らしや彼等との交流、日本語指導アドバイザーとしての活動、などについて話をしました。

（写真 6）

第十五回帰国報告会開催

梅雨も明けて、初夏の日差しの中、七月六日(土)午後一時半から三時間にわたり、千葉市国際交流プラザにて、当会主催の第十五回帰国報告会が、国際協力機構(JICA)、千葉県、千葉市の後援で開催されました。

参加者は一般聴講者を含め約六十名で、来賓には青年海外協力隊事務局次長 山田 健氏、同 国内協力員 南 裕子氏、青年海外協力協会(JOICA) 事業一課課長 佐藤義勝氏、青年海外協力隊千葉OB 副会長 成瀬 猛氏、千葉県海外協力隊を育てる会会長 田中保蔵氏をお迎えしまし



報告者(左より) 大久保、渡辺、福島、門間の各氏

報告はパワーポイントを駆使して行われ、参加者へのアンケート調査では現地活動の苦労、工夫が分りやすく参考になったという感想が多く見られました。

報告の要旨は次のとおりです。(文責編集担当)

コロンビアにおける体操競技の指導

門間 通氏

長年における日本での体操競技活動の経験にもとづいてコロンビアの体操競技のレベルアップを行い、オリンピックへの参加にとどまらず、上位に入るためには何が必要かという重い課題を背負ってコロンビア体操連盟に到着した。

体操競技には走る、投げ、泳ぐ、美を競う等のいろいろな事が含まれるが、赴任する前の現地情報はサッカーに関するものしかなく、赴任してから研究しようと考えていた。

まず、体操競技のレベル、組織、練習環境の調査から活動を開始した。ボゴタ市で体操競技の指導をする傍ら、国内各地の視察と指導を行った。

練習に必要なプロテクターが不足で、その製作も指導した。

分析機器の保守・管理と任国事情

福島和貴氏

配属先の国立水研究所はアルゼンチン・ブエノスアイレス州にあり、水資源の恒久的安全確保と供給、人と水との共存、水の有効利用、水と経済等をテーマとする同国最大の水総合研究機関である。

二〇〇一年から二〇〇五年にJICA実施の「産業公害防止プロジェクト」で供与された高精度分析機器類の保守が指導科目で、特に七年間ほど停止状態であった液体クロマトグラフ質量分析計の機能を確保することが主な任務であった。

配属先ではボランティアの理念と現地の実情を融和させる方向を目指し、技術と財政面の自助努力を引き出すべく注力した。しかし、液体クロマトグラフ質量分析計の機能の確保には成功したものの、周辺機器の安定化が任期中に未達成となり、心残りである。

輸入制限、雇用問題、電気事情、消耗品入手難、などインフラに問題があり、それらを前提とした保守方法を構築する必要がある。

マーシャル諸島共和国の教育事情

渡辺和男氏

首都マジュロのマジュロ教育省に算数、数学指導の技術

移転を主目的に派遣された。マーシャルは約五万五千人が二十九の環礁と五つの島に住む国で、首都マジュロの人口は二万四千人である。米国、台湾、日本の経済協力を受けている。熱帯性海洋気候で住みやすく、現地人の対日感情は極めて良かった。

マジュロ教育省はマジュロに十の公立校、他の環礁に百以上の学校を管轄している。私立学校は七校ほどで、独特の教育を行っている。

私の仕事は公立学校の先生方に算数・数学の授業研修、教育省主催の研修講座の補助、各学校で年一回実施の公開研究会の助言、マジュロ全校に年三回の試験で学力の把握と改善策提案、などであった。

マーシャルでは教育と就業が繋がりに難く、両親が教育の価値を認識できず、教育に関心の薄い家庭がかなり見受けられた。教員養成機関が無く、教員の専門的な知識は充分ではない。また、教科書、教材、教具は米国が支援しているが、子供達の英語力の不足、これらの教材が離島まで届かない、などの問題点を感じた。

フィジー国の水産物流通改善(フィジー自身による継続的改善システム構築を目指して)

大久保邦衛氏

水産物の流通改善の目的で

赴任した。フィジーの気温は年間ほぼ三十度前後だが、漁獲物を常温下、地面に敷いたシートの上に乗べて販売している状態だった。

まず、氷と容器を使用した低温下での流通改善から始めた。任期が終わる頃には、関係者が、自分達で調達した安価な使用済み植物油の樽を利用して、手作りの低温流通容器を作り、使用し始めた。手作りの低温流通でも生鮮水産物の品質の維持に有効であること、また魚価の安定に繋がるということが理解され、流通業者の意識が変わり始めた。

フィジーは南太平洋の平和な観光産業の国であり、英国植民地時代からの良い影響を数多く残している。持続的自力改善の動きも根づいてきたが、依然として外国援助に依存する傾向は強い。

自立を目指して、水産局職員達には食品科学の基本理論を、また漁業者達にはその応用実務を説明していった。

活動中に心掛けたことは、その国の人々と友情や良い人間関係を構築し、草の根の国際協力活動を推進することだった。

羽田 亨 副会長のねぎらいの挨拶で報告会が締めくくられ、その後、報告者と当会会員による帰国歓迎会が近隣の「美弥和」で行われました。

会員 寄稿

パラグアイの質生産性センターでの組織強化支援活動

田畑成章
(経営管理 柏市)



六十歳で定年退職し、リフレッシュのために大学に通っていたとき、JICA

ボランテニア要請の中に経営管理という職種があるのに気づき、三十五年超経営コンサルタントをやってきたのだからと思ひ応募しました。

現地に赴き、派遣先幹部達にニーズ確認した結果、最初の一年は回収改善、企業診断モデル開発、コンサルティン

グの新商品開発に優先的に取り組むことになりました。まず、最優先だった回収というテーマについて紹介します。派遣先の「パラグアイ品質生産性センター」(略称C



クライアント(右)をコンサルタント(左男性、中央女性)と訪問

EPPOCAL)はパラグアイ工業連盟(UIP)という経済団体がJICAの支援で立ち上げた部門で、企業研修とコンサルティング事業を行っています。

企業研修には公開講座と特定企業向け講座があり、回収が問題になるのは収益の柱にもなっているこの公開講座です。

多様なテーマ毎に一回く数回の講座が夕刻に二時間ないし五時間開かれ、様々な企業が一人から数人を参加させております。料金は講座の回数等により一人当たり数千〜一万円程度です。

銀行振込による事前徴収が標準の日本と異なり「お代は見てのお帰りに」ともいえる慣習、請求書や現金の取扱は母体UIPの財務部に限定する慣習、信頼性の低い郵便制度、まだ馴染まれていない銀行振込制度、などの要因もあり回収率を上げるのは容易ではないと思われました。

一年間の研修参加者別請求書発行と代金回収の状況を、何度もUIP財務部においてデータを集め、視力が落ちるのを感じながら分析しました。請求漏れが想定外に多いこと、電話督促すれば回収率が相当高まることなどが分かってきました。

その後、優秀な研修専任管理者が確保されたこともあり、研修が行われる夜間でも担当者が出席者に請求書を渡し、現金小切手も受取る、請

求漏れがないか、ある場合の理由は何かを研修ごとにチェックし、回収督促も丹念に行う、といったことが定着しました。回収率は大幅に改善されました。さらに、在任時には気付かなかったのですが、パラグアイでも普及が進んだ携帯電話による支払いを活用すれば、研修料の事前徴収も可能になると考えられます。

経営管理に関しては、年間予算の作成方法や業績管理表の改善などを要請に応じて行いましたが、これらの仕事は接触する人も限られ、正直言って心弾むものではありませんでした。

企業診断モデルの開発は経営コンサルタント経験を集大成すべく精魂こめて作り上げたが、モデルで診断できれば世話ないという気持ちは抜けませんでした。

新商品として「新規事業コンサルティング」の営業案内を作り売り出そうとしたところ、コンサルタントの教育が先ということになり、急遽資料を一から作り、研修を行いました。

コンサルタントとの交流の方がはるかに遣り甲斐を感じることが出来たので、二年目は「コンサルタント塾」の開催を提案し、実施しました。これについては以下のサイトで紹介しています。

http://globalchallenges.jica.go.jp/digest.php?id=12

ボランテニアの目で見たカンボジア

篠原温雄
(学校経営 八千代市)



プノンペン市の教育・青年・スポーツ局で二〇一〇年三月から二〇一二年三月

まで、二年間活動した。プノンペン市は首都で、メコン川とトレサップ川の合流する西側に位置しており、政治的、経済的また文化の中心でもあり、人口は百五十万七千七百二十五人(二〇一〇年)である。

カンボジアはポルポト派の虐殺と内戦の影響により、質の高い教育を受けた人材が極端に不足し、更に現在は義務教育段階での学校不足により、二部制の授業が午前の部(七時から十二時)と午後の部(一時から五時)で行われている。ほとんどの学校の教室には電灯がないのが当たり前



市内の小学生

前で、トイレの設備も無い学校もある。カンボジア政府はこの現状を改善するために、二〇一五年までに基礎教育就学者を三倍に増やすことを目標にして取り組んでいる。

私の配属先のオフィスは官庁街があるノロドム通りに面し、セントラルマーケットから延びる百三十通りの交差点の近くに位置し、計画室のサブット室長の部屋に机を置かせてもらった。

配属先は国の教育省の傘下であり、その施策に則って事業を進め、プノンペン市内の公立幼(二十二)・小(百六十四)・中(三十三)・中高(三十三)学校の教育環境の整備、教育内容の改善充実、教員の採用、研修など教育に関するすべての業務を行っている。

おもな仕事は、カンボジア政府が日本の資金援助を求め、二〇〇五年より建設された市内小学校十八校の校舎の現状調査や、小中高の学校調査訪問であった。校長や先生方と話をするなかで、各学校が抱える問題を聞くことができた。

市内の人口増加地域では生徒数の増加の対応に限界があり、教室不足や教科書の不足など、また十分な資格を持つた教師の不足など教育の質の問題がある。カンボジアでは教師という職業は人々からは大変尊敬されている。しかし、新任の教師の初任給は一

月約六十USD程度と低い。ほとんどの教員は教員の給与だけでは家族を養っていけないので、教師の仕事のほかにアルバイトをして、生計をたてている。その結果、カリキュラムはこなすが、目の前の子どもたちが授業を理解したかどうかは二の次になっている傾向もあるようだ。

カンボジアの人々の生活は朝が早い。近くのお寺のスピーカーから流れるお経の声、建築現場の金槌の音など午前六時前から聞こえてくる。私も、早起きして、独立記念塔（一九五三年フランスから独立）の横に細長く続く緑地帯に行くと、沢山の人々が、ウォーキングやジョギング、太極拳、足で打つバドミントンなどを楽しんでいる。カンボジアの人たちも生活に余裕ができてきたのかと思える平和な光景である。

そこからは、日々生きるために、猛暑の中、汗だくになって働く人や、裸足で物乞いをする人や、市場の雑然とした商品の山の光景、自動車やホンダ、スズキ、ヤマハのバイクや人々であふれる道路の光景とは違った印象を受けるのである。

カンボジアが自力で社会整備や経済復興ができるまでまだ時間がかかりそうである。日本をはじめ各国の援助支援はまだ必要だという思いが、帰国した今も強く残っている。

私のボランティア活動

川奈部くに子
(日本語教育 船橋市)



私は、三十五年間公立中学校の英語教師でした。教科指導

のほかに長年国際理解教育、帰国子女や外国人生徒の適応指導教育などを担当し、外国、特に開発途上国の教育事情や文化・習慣などを知る機会が多くありました。

そこで次第に現職で海外教育ボランティアをし、その体験を生徒たちに伝えたいと考えるようになりました。自費ボランティアとしてパラグアイへ

五十五歳の時JICAシニア海外ボランティア(以下SVと記す)に応募し合格しましたが、自治体の制度や家庭の事情等で「辞退」という大きな挫折を経験しました。

しかしそれが私の海外教育ボランティアへの熱望を増すことになり、二〇〇六年五十七歳で早期退職を決意し、知人を頼りパラグアイへ短期自費ボランティアとして赴きました。

たった四か月のボランティアでしたが、それでも私の経験や技能を十分活かすことができたことに大きな達成感を得て、翌年もまたパラグアイへ赴きました。

JICAシニア海外ボランティアとしてトンガへ

時が熟し、再びJICAボランティアに応募し、二〇一〇年一月念願のSVとしてトンガ王国へ派遣されることになりました。

配属先はトンガ教育・女性・文化省で、同国で二十五年以上続いている「日本語教育の推進と発展」が私の要請内容でした。

具体的な活動としては、①トンガの高校五、六年生が受験する「高等学校修了認定試験」の日本語試験を作成、実施、評価すること、②トンガ教員養成学校の日本語学科の学生を指導すること、③高等学校の日本語教科書を改訂すること、④日本語教師部会の運営や日本語関連行事への協力などでした。

①の試験作成では、文化レポート、口頭試験(二回)、筆記及び聴解試験と一学年四種類、合計八種類の試験を実施しました。

②の教員養成学校では、三



スピーチコンテスト出場者と

名の日本語学科の学生に教授法や日本語を教えました。

大使館主催の日本語スピーチコンテストに三名とも出場し、そのうちの一名が優勝し二週間の日本研修に招待されたことは大きな喜びでした。その学生は現在高校で日本語を教えており、彼女の教師としての成長を楽しみにしています。

③の教科書改訂は、一年目の活動ですべてを終え、二年目は改訂した教科書に準拠した音声教材を協力隊の日本語教師と協力して作成しました。

④に関しては、トンガ人日本語教師の資質の向上をめざし、日本文化体験やワークショップを行ったり、高校の「日本まつり」で浴衣を着せたり、巻き寿司を実演したりしました。

現在の活動

帰国して一年半が経ちますが、帰国直後から勤務していた市の教育委員会や教育団体から私の体験や国際理解教育、日本語教育などについての講演を頼まれたり、JICA地球ひろばの出前講座の講師として公民館で話をさせていだいたりしています。

またトンガから研修等で来日するトンガ人を自宅へ招いたり、中学校で国際交流の授業を行ったりしています。

今後とも教育のボランティアを国の内外で行っていきたくと考えています。

大連市でのIT技術教育活動

高橋知廣
(コンピュータ技術 船橋市)



私は、卒業後、日本のIT企業で三十五年間コンピュータシステムエンジニアとして従事しました。

一度は中国で仕事をしたいと思っていたので、偶然見つけたJICAボランティア募集に迷わず応募しました。「なぜ中国か」と言えば、仕事を通じて中国との関わりも多かったためその経験を役立てたい、高い経済成長のあふれる活力、子供時代を思い出させる都会の雰囲気の中で生活し、一緒に働くことで直接中国の人と交流し生の中国を理解したいと思ったからです。

配属された職場は、日本のODAで設立した「日中友好大連人材育成センター」で、大連に多い日系企業や、あるいは日本とのビジネスに関わりのある中国の企業の人々の技術者の研修を担うものでした。センターは、ITの他、ビジネス日本語、生産管理、経営管理の四分野(学部)で構成され、私の在任期間は、各学部でJICAボランティアが、ほぼ一名ずつ配属されていました。同僚の中



講義風景

国人達もほとんどが日本語堪能でしたので、日本の職場のような雰囲気でした。派遣前にJICAの中味の濃い中国語訓練を受けました。が、「実用レベル」の習得にはほど遠く外国語習得の難しさを改めて感じました。したがって講座では通訳や教材の翻訳などを同僚に依存せざるを得ません。IT分野は専門用語が多く、翻訳にはIT経験が必要ですが、同僚はその経験はないもののこの機会にITを学ぼうと努力してくれました。気のよい優秀な青年で日本語も完璧、一緒に仕事が出来たのは幸いでした。センターは設立当初は日本人主体の立上げプロジェクトによる運営でしたが、二〇一〇年からは中国人の経営管理に移管され、私が配属された時には、既に自主運営状態でした。

私にとって女性上司は初めてで新鮮に感じました。大連市では、公共交通機関の運転士など、日本では男性主体の職業にも女性が多く女性の社会進出は日本以上であると感じました。センターの経営母体組織は大連交通大学で、その就業規則に準じているからか、勤務時間は比較的短く、十分な自由時間がありました。これを利用して日系のIT企業の集まり(大連ITクラブ)やその他OB会など集まりに積極的に参加しました。これらの活動も大連の生活を豊かにしてくれました。二年間を振り返ると、要請任務には多少物足りなく感じていますが、期待していたことはまあまあ得られた様に思います。ただ「中国語習得程度」には反省しています。同期間で飛躍的な進歩を遂げたボランティアの方もおられるだけにおおさら努力不足を後悔しています。大連での二年間、生活面などいろいろサポート頂いたJICA北京事務所の方々、暖かく職場に受入れていただいたセンターの皆様に感謝しています。

フェスティバルに参加

松戸市民活動団体見本市

三月九日(土)十時~十六時に松戸市民活動サポートセンターにおいて六分野および七

十四団体が参加、来場者千五百名で賑わいました。本郷谷健次市長の挨拶に始まり、各種のシンポジウム、イベントが行われました。当会は本見本市に初参加で、二階の国際グループコーナーに出展し、パネル展示と各種資料配布を行いました。参加団体は国際グループの他、福祉、環境、学術など市民活動の全般にわたり、国際交流への市民の更なる関心を獲得する事が課題です。



本郷谷市長の挨拶

国際フェスタCHIBA

五月十九日十時~十五時に美浜区の神田外国語大学キャンパスにおいて、千葉県国際交流センター主催、千葉県、神田外国語大学、神田外国語大学学生ボランティアグループPの後援で開催されました。

国際交流・協力団体紹介ブースには二十二団体が参加したが、当会は一〇一号室でパネル展示とSVニュース、概要の配布で活動を説明し、JICAボランティア応募相談に応じました。また、

全体のスタンプリーにも参加して、フェスティバルを盛り上げました。当日は好天にもめぐまれ、会場外では第九回幕張チャリティー・フリーマーケットも開かれ、賑やかな春の一日でした。



会場の品川洋之助、酒井國彦、津田正臣の各会員

平成二十五年役員人事

五月十九日に開催された総会で、平成二十五年役員として次の諸氏が選出されました。

会長	津田 正臣	千葉市
副会長	及川 淳一	船橋市
副会長	羽田 亨	柏市
事務局長	酒井 國彦	千葉市
幹事	大西 輝明	浦安市
幹事	白鳥 貞夫	柏市
会計監査	加藤 哲男	流山市
〈新任〉		
幹事	大久保 邦衛	浦安市
幹事	坂出 直哉	千葉市
〈退任〉		
会長	山本 茂穂	千葉市
副会長	横田 勝徳	千葉市

会員動静 (敬称略)

顧問人事 (参考)
〈再任〉 品川 洋之助 鎌ヶ谷市
山本 茂穂 千葉市
〈新任〉

会員数 (平成二十五年八月八日現在) 九十八名

会員異動 (平成二十五年五月以降)
退会者 五名
入会者 三名

再派遣者 (平成二十五年八月八日現在 派遣順)
濱崎 丘 (ベリーズ) 柏市
廃棄物処理
小松 秀世 (エチオピア) 山武郡
給水施設計画 (メキシコ)
黒須 英典 (マレーシア)
適正製造基準 鎌ヶ谷市
後藤 令子 (マレーシア) 千葉市
養護 (エチオピア)
渡邊 章 (エチオピア)
保健 (重門家派遣) 松戸市
浦木 仁 (チリ) 千葉市

品質管理 市原市
入会者 (八月八日付)
門間 通 (コロンビア)
選手育成指導法 成田市
福島 和貴 (アルゼンチン)
応用化学 四街道市
渡辺 和夫 (マレーシア)
算数・数学 千葉市

退会会員

在会中のご協力ありがとうございました。
浅見 洋 大西 周作
金子 泰之 堀 甲子男
水野 純也

新SV千葉県庁表敬訪問

三月二十二日(金)午後、JICA地球ひろば地域連携課 長谷川敏久課長の引率で、平成二十四年度第四次隊の青年海外協力隊員七名及びシニア海外ボランティア浦木 仁当会会員、杉田利之、田村かおり、中村良一、山崎暢子の五名の方々が千葉県庁を表敬訪問し、総合企画部 平井俊行



JOCVとSVの皆さん(中央 平井部長)

部長の激励を受けました。当会からは横田勝徳副会長が同席しました。

同じく六月二十四日(月)午後、青年海外協力隊事務局 参事役参加促進・進路支援課 菊池智徳課長の引率で、二十五年度第一次隊の青年海外協力隊十五名およびシニア海外ボランティアの久保治夫



JOCVとSVの皆さん(中央 坂本副知事)

(ジャマイカ 土木)、三輪達雄(ブータン 農業協同組合)の二名の方々が千葉県庁を訪問し、千葉県 坂本森男副知事の激励を受けました。当会からの同席者は酒井國彦事務局長でした。

JICAボランティア秋募集

JICAシニア海外ボランティアおよび青年海外協力隊の秋募集説明会が左記のとおり開催されます。会場ではパネリストによる体験談発表や、よろず相談があります。

■ 十月八日(火曜日)

船橋会場(きららホール) フェイスビル六階 (船橋駅徒歩一分)

- ・シニア海外ボランティア
・青年海外協力隊
十九時〜二十一時

■ 十月十九日(土曜日) 幕張会場(幕張メッセ国際会議場一階一〇三会議場) (海浜幕張駅徒歩五分)

- ・シニア海外ボランティア
・青年海外協力隊
十四時〜十六時

十月八日および十月十九日ともに会場は合同で行います。

各説明会への参加は会場に直接お越しください。JICAボランティアに関心のある皆様をお待ちしております。

青年海外協力隊事務局便り

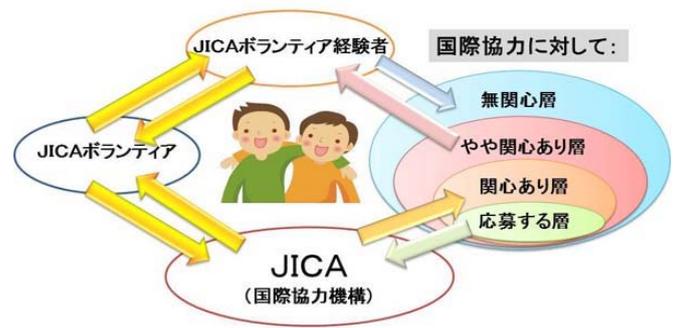


初めまして! 参加促進・進路支援課 国内協力員の南裕子です。

本年一月までネパールに村落開発普及員(現在のコミュニティ開発)として派遣されていた協力隊OBです。

二月より関東一都六県のOB会の支援経費、自治体表敬訪問、家族連絡会、全国のOBイベント情報のWEB掲載を担当し、日本で元気に活動されているJICAボランティアOBの皆様と日々接する中で勉強させていただいております。

先日の貴会第十五回国報告会では、派遣国で語学やさまざまな困難に苦しみながら



ボランティア参加促進は重要な業務の一つです

も、協力隊員や現地スタッフと協力しつつ、JICAシニア海外ボランティア(SV)の技術を上手に移転した活動報告を聞かせていただき、感銘をうけました。また、多くの市民の方々がSVの活動に関心を深めている様子も素晴らしいと思えました。いま私がとりかかっている仕事は、JICAウェブサイトのOB関連のイベント情報を更に活用していただけるよう、最新情報の更新に努めることです。青年海外協力協会の「かわら版」やOB会に声を掛けしておりますが、お近くに素敵な活動を行ってOBの方がおられましたら、ぜひご一報ください。

編集後記

創立十周年記念の勇壮な和太鼓の響きを思い出しながら特集号の編集にあたりました。当会の今在るはOBの熱意と活動支えて下さった方々のお陰で、十周年に万感の思いを抱かれた方々のお声を記念号に網羅しきれなかったことをお詫び申し上げます、特集記事を次号に継続致します。

本誌は創刊時よりA4縦組み右綴じで刊行されて来ましたが、記事にアルファベット表記が多いことやファイルの利便性から横組み左綴じにデザイン変更してはどうかとの議論が起りました。

各人の慣れや感性もからみ議論の集約に至りませんでした。読者の皆様のご意見もいただき、内容・体裁共によき親しみやすい機関紙として成長を続けたいと思っております。今後よろしくご支援ください。(白鳥貞夫)

ご意見、ちば出前講座のお問い合わせは下記にお願いします。

千葉県JICAシニアボランティアの会 (The Association of JICA Senior Volunteers in Chiba) 043-253-3075 (津田) mytsuda@tbt.t-com.ne.jp

JICA千葉デスク国際協力推進員 043-297-0245 (田村) jicadpd-desk-chibaken@jica.go.jp